古来、日本は舶来ものを上手に自分達の文化として根付かせてきた経緯がある。資源の少ない我が国は、輸入品を加工して逆に輸出するという“加工貿易”が得意であると、学生時代に習ったものだ。さて、ジャズは舶来品である。歴史はこの欧米産の音楽も例外ではないことを証明している。なぜなら日本には、日本ならではのジャズを形作ってきた偉人がいるから……。

大和ジャズ・ギタリスト偉人伝説

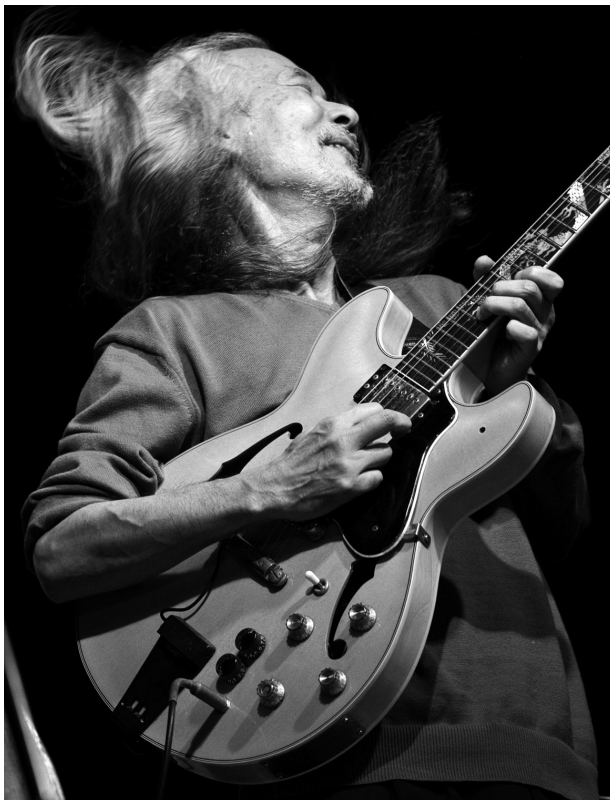
シリーズ第11回

ギル、エルヴィンに選ばれし才能

川崎 燎

Ryo Kawasaki

語り：川崎燎
Story by Ryo Kawasaki
聞き手：山中弘行
Described by Hiroyuki Yamanaka



全ては“好奇心”の追及に始まる

母が買ってくれたギター

明治23年生まれの父は外交官で各国を巡り、20歳年下の母はロシア語、ドイツ語、英語を操る女性でドイツ諜報部に係る仕事をしていた。太平洋戦争が終わり、父はシベリアに抑留され、僕をお腹に宿していた母は、上海から強制送還されて日本に戻り、僕は東京の高円寺で生まれた。人生の最初の記憶は、'51年4月24日に横浜市の桜木町駅で起きた電車事故“桜木町事件”だ。当時4歳だった僕は、父が読んでいた新聞に掲載されていたこの事故の記事を今でも鮮明に記憶している。

世田谷区梅ヶ丘での我が家の生活。父の友人のアメリカ人や、母の友人のロシア人達の会話が飛び交い、いつも洋楽が流れていた。4歳の頃からヴァイオリンと声楽を習っていた僕は、日本語よりも先に譜面を読むことを憶えていた。9歳から友人の兄の手ほどきでウクレレを弾き始め、コード・ブックを頼りにあまり苦労することもなくその術を体得していった。小学校のときに凝っていたのが天文学。先生の影響もあり、望遠鏡を自分で作るほど好きで、皆既日食の観測チームのリーダーだった。その興味も東京の空の曇りと共に薄れていったようだ。中学2年生の頃に、母がクラシック・ギターをプレゼントしてくれた。これがギターとの出会いだ。

僕が中学に上がった頃、NHKがFM放送を始めた。それまでは長波、短波ラジオしかなく、お気に入りはFENの番組。でもどうして

もFMで音楽が聴きたくて、FMチューナーを自分で作ってしまった。もちろんオーディオ・アンプなども。子供の頃から好奇心が強く、何かを見ては「どうして？」と疑問が湧き、次に仕組みを調べては自分で作ってみる。そんな性分が今でも抜けないのだから、人間の性格とは愉快なものだ。そして聴いたのがナット・キング・コールの「キサス・キサス」や、レス・ポール＆メリー・フォードやベニー・グッドマン、グレン・ミラー、カウント・ベイシー、デューク・エリントン、エラ・フィッツジェラルド、ビリー・ホリデイ等だ。それ以前は両親が好きだった78回転SP盤のキューバ音楽（サルサの前身）、シナトラやビング・クロスビー、ルイ・アームストロング等が僕の心に残る音楽だった。

僕が思うに、ジャズとはフェイクの音楽で、インプロヴィゼーションが優先するものではない。現在ジャズ・スタンダードと呼ばれる名曲も、元来はミュージカルや映画音楽であり、それをジャズのリズム上でフェイクしたものだからだ。だから僕のギター習得法も、コードを憶え、メロディを弾き、次にコードとメロディを同時に弾けるようにし、その上でメロディをフェイクするという手法だった。

学生時代の思い出

僕が青山学院中等部に進学するとき、父は青山学院大学で英語を教え始めた。そして我が家も恵比寿と渋谷の間に引っ越しをした。そして僕のライヴァルとなる同級生、神谷重徳との出会いが互いの競争心を煽ることになる。当時の僕は既にジャズ・ギターが少し弾けていたが、彼も同様だった。高等部に進むと僕らは、先輩である荒木一郎さんが創設した“軽音楽部”に入った。初めてエレキ・ギターを買ったのもこの頃で、今は懐かしいテスコ製だった。当時は、ポール・デスモントの「テイク・ファイヴ」が如何に上手く弾けるかを競うのが１つの指針でもあった時代だ。

彼との共通点は音楽だけではなく電気工学もそうで、共に“ラジオ部”なる部活にも参加しては学園祭などに自作の作品を出品して競っていた。当時僕が作ったのが“ステレオ・テープ・レコーダー”だ。まだモノラルのオープン・リールしかない時代に、僕は２台を組み合わせてステレオで録音出来るようにした。それを作ろうと思ったのは、自分の演奏をオーヴァーダビングしたかったから。ヘッドの位置がずれればエコーになってしまうので、なかなか苦心した。次に作ったのは電子オルガンで、トーン・ジェネレーターという回路から様々な周波数を生み出す仕組みで、シンセサイザーのようなものだ。

当時はカラーTVや蛍光灯が登場した時代。この頃のお気に入りはジム・ホール＆ポール・デズモンドの『テイク・テン』だった。青山学院からほど近い渋谷の道玄坂の百軒店には、当時“ありんこ”“DIG”なるジャズ喫茶があり、その後“オスカー”も開店した。授業を抜け出して、そこに行ってはレコードを聴くというのも日課だったが、校門が閉められてしまうので、戻るときは塀を乗り越えることになる。当時人気のケニー・バレルの『ミッドナイト・ブルー』はお気に入りだったが、僕が生涯を通じて最も尊敬しているはグラント・グリーンなのだ。

大学は理工学部のある日大に入学し、量子力学を専攻した。進学したとはいえ、毎日ギター仕事と麻雀に明け暮れていた。僕の行きつけは池袋にあった“アンデルセン”という喫茶店。店に集う気の合う仲間たちで作った“アンデルセン”というバンドにも凄腕が集まっていた。ここで出会った仲間は多く、のちに“筒見京平”となる栄ちゃんこと渡辺栄吉さんもその１人だ。その中にいた１人がTBS関係の仕事をしていて、僕はTBSのレコード・ライブラリーに行ってはバーニー・ケッセル、ビリー・バウアー、ジミー・レイニー、ジャンゴ他、ありとあらゆるレコードを借りては自宅で録音して聴きまくった。自分のバンドでの活動も順調で、いつしかヤマハ音楽振興会が開催する某コンテストの審査員にもなっていた（大学生なのに）。そのとき増尾好秋君のバンドも参加していたのを憶えているが、何より、ハワイアン部門で優勝したバンドでギターを弾いていた女性に一目惚れしたことの方が鮮烈な記憶だ（笑）。こんな大学時代だったが、“日大闘争”によって、みんなが追い出されるように卒業させられたもの強烈だった。

初リーダー作の裏側

この時代に知り合ったのが、山下洋輔氏のバンドにいたサックスの中村誠一、ドラムの森山威夫、フルートの宮田英夫さん達。彼らのバンドに参加し、新宿ピットインなどにも出演するようになった。その後、猪俣猛さんや、稲垣次郎さんのバンドにも加入した。そんな折にポリドールから、僕のギターをメインにしたレコーディングの話がきた。アレンジャーは前田憲男さんで、オーケストラが入っていて、ピアノは大野雄二、ドラムが村上寛でベースがチンさん（鈴木良雄）。メンバーは僕が集めたんじゃなく、“インペグ屋（ミュージシャンの手配を専門に行う業者）”が勝手に選んだらしい。まるでCTIのウェス路線を狙ったような作品。それが僕のデビュー作『恋は・フェニックス』なのだが、発売当時は僕の名前は小さく掲載されているだけだった。

この頃のスタジオ仕事は、朝９時から深夜０時までに及ぶことも多く、中学時代からのライヴァルである神谷と“年収1,000万円競争”なることをしていた。当時人気のスタジオ・ギタリストは中牟礼貞則さんと杉本喜代志さんだ。暫くして直居隆雄君もスタジオに入って来た。３～４年もすると流石に疲れて嫌気も差してくる。そうして僕はジャズをやりたくてNYに渡る決意をした。'73年６月のことだ。

▲ギル・エヴァンスとのギグにて。

怒涛の如き'70年代

最初の渡米では、まずLAの“シェリー・マンズ・ホール”でガボール・ザボの演奏を聴いた。その後、ピッツバーグを経てNYを訪れたときには、いきなりニューポート・ジャズフェスに参加していた（笑）。NYではドラマーの岸田恵士君のアパートに居候させてもらい、ベースの中村照夫氏と演奏をして楽しんだ。日本でブックされたままの仕事や身辺整理のために一旦帰国。ピアノの益田幹夫君や、トロンボーンの向井滋春君、サックスの植松孝夫君らとのバンドで日比谷野外音楽堂でのジャズフェスに出演したとき、そのイヴェントに出演していたジョージ・ベンソンと仲良くなった。そして'73年10月に再度NYに渡ったときに真っ先に連絡したのがジョージだ。当時、彼はアール・クルーと一緒にクラブに出演していたが、お

客の入りはまばら……。「なぁ、Ryo。僕はいつかラスヴェガスに行って、満員のお客の前でショウをやりたいんだ」と話していたのを憶えているが、その夢はほどなくして叶うことになる。

ある日のこと、僕のアパートの前に佇む1人の白人男性。ギル・エヴァンスではないか！　ジャケットや雑誌などで顔は知っていたが、会ったことはない。そんな彼がなぜここにいるのか？　ギルは僕に譜面とカセットを渡しながら「来週からヴィレッジ・ヴァンガードで演奏を始めるから来てくれないか？」と言う。英語がまだちゃんと話せなかった僕を助けてくれたのは、当時エルヴィン・ジョーンズのローディをしていた安永正君だ。何でもギルのところにいたジョン・アバークロンビーがビリー・コブハムのバンドに移ったので、代わりのギターが必要だと言う。しかも、ジミ・ヘンドリックスとギルとでLPを作る予定だったが、ジミが死んでしまい、RCAとの契約で何としてもジミの曲をアレンジした作品を作らなければならず、ヴァンガードでの演奏はそのリハーサルを兼ねたものらしい。それが'74年にリリースされたギルの『プレイズ・ジミ・ヘンドリックス』だ。これが僕とギルとの出会いであり、彼はのちに僕の永住権取得の際に大きな力を貸してくれた。僕がギルのバンドからエルヴィンのバンドに移ることも快く受け入れてくれた。本当に感謝だ。

▲3作目『ジュース』の録音風景。

これを皮切りに、僕のNYでの生活はツアーとレコーディングの連続になった。あのシダー・ウォルトンが僕とスティーヴ・ガッドを起用して作った珍しいフュージョン作『Mobius』。チコ・ハミルトン・バンド、エルヴィン・ジョーンズのジャズ・マシーン活動等々。それらと並行して僕自身も『プリズム』('75年)、『エイト・マイル・ロード』('76年）という実験的な作品を作っていた。当時、僕の演奏を気に入ってくれたRCAのマイク・リップスキンが強力にプッシュしてくれて作り上げたのが『ジュース』('76年）だ。のちにヒップ・ホップのアーティストがこの作品を使い大ヒットとなったのだが、僕がリリースして20年以上も経って、多額の印税が振り込まれたのには驚かされた。

トニー・ウィリアムスのライフ・タイムからテッド・ダンパーが抜けたあと、僕が加入し、リハまで行っていたのだが、突然トニーが失踪するという事件があった。その後、トニーは欧州にいたのだが、結局アラン・ホールズワースが加入してしまった（笑）。みんながマイルスの影響を受けてこぞってバンドにギターを入れていた時期。とはいえ、どんなスタイルでもこなせるギタリストの数は限られていて、ローランド・プリンス、バリー・フィナティや僕等に声が掛ることが多かった。エルヴィンとのツアーは楽しかったが、1年間に10ヶ月間も旅をし、何百回とギグをするのだから、NYに戻ったときは「Ryo！　いたのかい？」といった具合で、その間に新しいギタリスト達が、僕の席に座るといった感じだった。そんな生活にピリオドを打ち、ジョアン・ブラッキーンとデュオでツアーを重ねた結晶が『Trinkets And Things』('79年）だ。僕のリーダー作では、NYでレコーディングした『ミラー・オブ・マイ・マインド』('79年）は、ラーダ・ショッタムのヴォーカルも上手くフィットしたお気に入りの1つだ。

▲左から川崎、エルヴィン・ジョーンズ、パット・ラバーバラ、デヴィッド・ウィリアムス。

シンセとプログラミング

'79〜'83年は、僕がギター・シンセを駆使していた時期だ。ローランドのGR-500に音源モジュールのGS-500を繋ぐのだが、自分の思った音に近付けるために自作でエフェクトやループ、シーケンサーなどを搭載した大きなラックを組み上げた。まだ世にラックの基準が出来上がる前の話だ。それを使い、プラネタリウムを回るツアーを行ったのも何だか懐かしい。

'84年、僕はバンドでの活動を一切休止してしまった。理由は“僕の好奇心がコンピュータに移った”からだ。ここからの約3年間はPCの元祖である“コモドア64”のための音楽ソフトの開発に明け暮れた。とは言っても、プログラミングについて正式な教育など受けたこともなく、ネットのない時代に雑誌や書物から知識を得たのだから“好奇心”とは凄いものだ。結局4本のソフトを書き上げたのだが、のちに僕のソフトの1本を日本向けに書き直す作業に、ある企業は優秀なプログラマーを27人擁し、6か月かけたらしい。この間は全くギターに触れる時間もないほど、ソフト開発に集中力を注いでいた。

僕が音楽シーンに戻ったとき、それはジャズではなく、自作のソフトでの打ち込みをメインにしたクラブ・ミュージックだった。その後、'93〜'98年にリリースしたものは、新しいA-DATと打ち込みでのスムース・ジャズ作品で、中には全米1位になったものもある。ただ、僕は常に自分はアコースティック・ギター奏者だと思い続けている。それはギターを始めたときの原体験なのかもしれない。ソロ・ギター作『ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア』('92年）は、そんな僕　の原点に返った作品。

エストニアからの未来

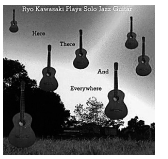
'99年に初めて訪れたエストニア。実は僕の家に居候していた女性がエストニアに帰

川崎燎を堪能する4枚

『恋は・フェニックス』
川崎燎
（ユニバーサル）
UPCY-6414

『ジュース』
川崎燎
（アリスタ）
BVCJ-37366

『ミラー・オブ・マイ・マインド』
川崎燎
（ソニー）
VRFL-0005



『ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア』
川崎燎
（ビデオアーツ）
VACZ-1438

かわさき・りょう：1947年2月25日、東京は高円寺に生まれる。4歳からヴァイオリンと声楽を学び9歳でウクレレ、12歳からギターを始める。日本大学理工学部在籍中の'67年よりプロとしての活動を開始。ジャズ・シーンのみならずスタジオ・ミュージシャンとして活躍後、'73年に渡米し、NYを拠点にギル・エヴァンス、チコ・ハミルトン、エルヴィン・ジョーンズ、ジョアン・ブラッキーン、デイヴ・リーブマン等と共演し、多くの作品に参加する文字通り国際的ギタリスト。自己のアルバムも20作を超える。最新作は鈴木良雄とのデュオ作『AGANA』。現在エストニア在住。

国し、かねてから「素晴らしい国よ！」と語っていたことが記憶に残っていたので、パリに行った帰りに首都のタリンに立ち寄った。ところが、たった10日間の滞在にも関わらず、5回も仕事の依頼がきて驚いた。ちょうど国立オペラ・ハウスで開催が決定していたジャズ・バレーの作曲者を探しているという偶然も重なり、それ以来21回もNYとエストニアを往復することになった。

'01年9月11日の惨劇もあり、大都市の生活にも疲れ、その以前からNYに新しいものを感じなくなっていた僕は、その年にエストニアの居住権を取得し、この地に移った。生活はいたって快適で、音楽仲間にも恵まれ、EU内の動きも自由。今年の12月にはチンさんとの新作もリリースされるし、年明けには僕のエストニアでのレギュラー・グループ“Art Of Trio”によるライヴ作品『Kumu Concert〜Tribute To Keith Jarrett』もリリース予定だ。新たな好奇心がまた騒ぎ始めている。

▲GR-500を持つ川崎の背後にあるのが自作のマルチ・エフェクト群だ。

◀現在の愛器は'80年に入手したヤマハ製SA-2000を自ら改造したもの。

盟友からのメッセージ